



第223號 (第 20 卷)

(昭和14年) 12 月 號

卷頭

宇宙を觀る、人生を觀る

隨筆

山 本 一 清

十月の末の或る日、久しぶりで來訪した東京からの一人の客が、時局談や文藝談に花を咲かせた後、ふと話頭を轉じて、

“先生の感化で、私は今まですいぶん天文の書物を読みました、今になつて考へて見ると、天文書といふものは、どれも、これも、同じやうなことが書いてあつて、案外に單調なものです。言はず、小兒のやうな心になつて楽しむことは出來ますけれど、しつくり其れを嚙みしめて味はつて見るといふ大人の趣味としては何だか満たされませぬやうに思ひますが、如何でせう？”  
と言はれて、自分は誠に急所を衝かれたやうに感じた。

實際、自分も、年末、ひそかに感じてゐたところであるが、我が國で、人々が楽しむ“天文の趣味”といふものは、誰でも一應直ぐ飛び付き易い面白味ではあるが、一通りの味を味はつた後には、何だか其れ以上の深味ふかみが無いかのやうに思はせられる。近年、天文の普及によつて、天文書も澤山出版されるが、よく見ると、何れも皆干遍一律で、記述にも、圖版や、表などにも變化が乏しい。従つて、“圖説天文講座”などを一通り讀みこなした後は、他の如何なる書物を見ても、其れ以上の新味も深味も、獲られない恨みがあるのは事實である。尤も、世間に天文の趣味が普及したと言つても、今では未だ々々不充分であつて、天文のテの字も知らない人々が社會には多いのだから、今後も尙ほ、天文の入門書や、通俗書が、引きつづき、幾らでも賣れるには相違ないし、東京や大阪のプラネタリウムに入場者の種の盡きること、先づ有るまいとは思ふが、それにしても、昭和の現代には、今少しゆかしい深味のある天文趣味が我が日本の知識社會に味はれても好いものだらうと、しきりに思ふ。偶然とは言ひながら、最近、自分の机上には、ドイツから Menzzer 譯のコペルニクスの改版が届いたし、又、それと前後して、米國からは F. R. Johnson 氏の“ルネイサンス時代の英國に於ける天文思想”といふ新著が到着した。かうした種類の書物が我が日本の讀書階級に歡迎される日が來なければ、天文の深い趣味

が徹底したものとは言ひ得ない。

尤も、明治から今日までに歩んで來た天文普及の道程は、我が日本として、決して邪道を進んで來たのでは無かつた。殊に大正の中頃から近年に至る僅々十數年間に通俗天文書の普及、新聞雑誌の天文記事取材、反射鏡の普及、天文展覽會の頻開、觀測の流行等、可なり多方面に天文の知識は進展して來た。しかも、此うした天文普及の間にも、西洋諸國に見るやうな迷信が附隨しないことは、誠に喜ばしい現象である。しかしながら、此等の事は、皆、要するに“通俗天文學の普及”の一言に盡きるのであつて、ひろく正しい意味に於ける“天文學”、“天文趣味”乃至“天文思想”の普及の、單なる先驅をなすものに過ぎない。今日のまゝに止まる以上、世の一般人士は、“通俗天文學”を“天文學”の全部と誤解する恐れが多分に存在するを免れない。

勿論、我が國の學界を見ると、そこには、アマチュア天文家のほかに、嚴然として“職業的天文家”が存在してゐる。此等のプロフェッショナル天文家は、其の職に對する義務として、“通俗流”の天文學とは甚だしくかけ離れた専門學を研究し或は其の特殊な技術を運用してゐるので、只、其の僅かなる餘暇に、講話又は文筆を以つて、學術の解説と普及に勤めてゐる。今日までは、此等の職業的天文家が、天文學の通俗化のためには、唯一の指導者であつたわけであるから、従つて、現今の坊間に見えてゐる“通俗天文趣味”をもたらしした責任者は、即ち彼等“職業”者であること、言ふまでもない。故に、上にも記した如く、今日、我が天文學の普及状態が、著しく遍してゐて、全く深みの無い、味はひのない、奥行きが無い、又、思想の無い、即ち、すぐ飽き易い、小兒だましの天文學に墮しつゝあるのは、實に、彼等“指導者”自身が持ち合はせる頭腦の内容を物語るものである。職業的天文家の腦裡は、只“技術”(手や頭腦の)あるのみ。従つて、彼等に指導されるアマチュア天文家は、せいぜい“プチ職業天文家”になることを目的としてゐるに過ぎない。

自分は今まで永い間、東西の諸大學に於いて、始め可なり優秀なる天文家の資格を備へて入學した青年學生が、三四ケ年の課程を卒業する頃には、全く一變して、天體を楽しむことを忘れ、只單に有形無形の技術にのみ安んずる“専門家”となつて了ふのが常である例を多く見、我が國の天文文化の發達のため、大に考へさせられる次第であつた。

かうした至んだ“アマチュア天文學”から、眞性の“アマチュアリズム”に進ましめるためには、第一に、指導者たる“職業的天文家”の頭腦を改造してかゝらなければならないのであるが、之れは言ふべくして殆んど不可能に近いのであるから、自分の意見としては、むしろ、やはり、アマチュア達自身の中から眞の優秀な“アマチュア”が出でて、正しい學藝の興隆を待つより外に道はないと

思ふ。二千年の文化史を持つ我が同胞のことであるから、指導さへうまくすれば、優れた天文趣味者や、天文思想家などが必ず輩出するものと思ふ。

とにかく、今、吾々は、“現在の我が日本のアマチュア天文學は、指導精神の貧困に由來して、實に遍した、不具な、歪曲された天文學である”ことを一般に認識せしめ、正式には、アマチュアリズムを再出發しなければ、この行きづまりを、何時までも打解することは出来ないことを知らしめなければならない。——讀者諸氏よ、自分のこの考へが、眞に了解して頂けるか、如何か？ 若し了解して頂けなければ、更に稿を新たにして、自分の理想境を説明して見ませう。

去る十月末、吉田泉殿の舊居から、自分は平野神社の北西に當る新居に移つたが、同時に、英子の病氣療養のため、滋賀縣草津町にも第二の寓居を構へた。其の場所は同町大字大路井（オチノキ）第420番地、といふよりも、むしろ旭橋の北詰と言つた方が好い。誠に小さい家屋ながら、門前には二百坪ばかりの池があつて、魚も釣れれば、小舟も漕げるし、又、後方には草津川の堤防があつて、櫻の樹が澤山植えられ、春は毎年このあたりへ花を見に来る客も夥しい由である。草津は近年停車場の近くに競馬場が出来て、其のシーズンには遠近から幾萬の人々を呼んでゐるやうであるが、自分は馬の趣味を有たないから、今は競馬に何の興味も湧かない。それよりも自分にとって此の草津の寓居が嬉しいことは、郷里に近いことである。郷里“桐生”には永年來“桐蔭文庫”と自稱してゐた祖父栗齋以來の藏書を中心とした書庫を建てた。此所へ自分の藏書も多く運び込み、今は、階上も階下も可なりギツシリつまつて了つた。閑な時には此の郷里に歸り、朝夕この“文庫”の中に座して、研究を營み、好きな書物に読みふける氣持ちは、全く他では味へない。用事が出来れば、草津へ、京都へ、或は東京へ、北京へ、………何時でも飛び出すことが出来る。今暫くの間は、まだ、書物の分類や整理に忙しいので、毎月の半ば以上は桐生に暮すことにしてゐる。空がよく澄んで、星が美しく見えるのも郷里のアトラクションであるが、京都に比べると、夏は非常に涼しい代り、冬も可なり寒いのは止むを得ない。

### “インチ”と“ヤード”の長さ

英國の National Physical Laboratory で、Sears 氏と Barrell 氏とが“ヤード”の原器の長さを、カドミウムの赤色スペクトル線により精密に測定し、其の結果から下の如き確定的な結果を獲た：

$$1 \text{ 吋} = 25.4 \text{ mm} \qquad 1 \text{ 「ヤード」} = 0.9144 \text{ 米}$$

此の價は從來英米兩國で用ゐられてゐた價の平均に近いものである。